

書と詩11―書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころ―

明治維新後、公用書体は、お家流から、唐様へと転換され、漢字は巻菱湖流、仮名は加藤千蔭流が用いられた。しかし、皇族や公卿をはじめ、一般には、明治になっても、長い間、お家流が書かれていたし、唐様の公用文は江戸時代にも書かれていたから、維新になって急にガラッと変わったというわけではない。

明治から昭和、幕末の三筆の巻菱湖、貫名海屋（荻翁）、市河米庵の門下からは多くの書家が育っていった。

巻菱湖↓中沢雪城↓巖谷一六・金井金洞・西川春洞↓豊道春海・西川寧↓青山杉雨。

巻菱湖↓萩原秋巖↓小室樵山・村田海石↓玉木愛石・西脇呉石。巻菱湖↓巻百里↓巻菱潭。

市河米庵↓市河万庵、小島成斎↓野村素軒・高橋泥舟・内田栗陰↓太田竹城↓川村驥山。

市河米庵↓山内香雪↓中林梧竹。（成斎も梧竹も途中で米庵門を出た）

貫名海屋↓越智仙心・稲垣碧峰・松田雪柯↓久志本梅莊・松田南溟。松田雪柯は、巖谷一六と日下部鳴鶴に述筆

法を教えた。そして、日下部鳴鶴・大野百鍊・丹羽海鶴は海屋に私淑した。日下部鳴鶴↓近藤雪竹・渡辺沙鷗・丹羽

海鶴・山本竟山・岩田鶴皐・比田井天来ら↓上田桑鳩ら。

幕末の三筆の他に、名古屋には恒川宕谷の名門書塾の系譜がある。宕谷の門下生は60余年間で二万余人という。

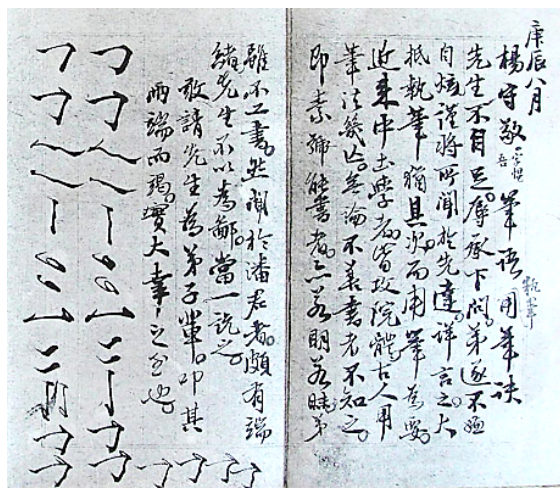
恒川宕谷↓恒川篤谷↓恒川樵谷。恒川宕谷↓渡辺沙鷗・大島君川・岡山高蔭ら↓藤岡保子。

京都には、宮原節庵、神山鳳陽、草場船山、頼支峰らがいた。その他、明治維新に活躍した、西郷隆盛や新政府の元勲の書が重んじられ、篆刻も流行した。1880年（明治13）の楊守敬の来日以後、北碑派の書風が始まり、唐様の2派に代わって、明治末まで北碑書道（六朝書道）が書道の主流となったが、長三洲や成瀬大城・金井金洞らは、六朝書道に反対し顔法に傾倒した。その他、子規・漱石・晶子ら詩人や作家の書が素晴らしい。

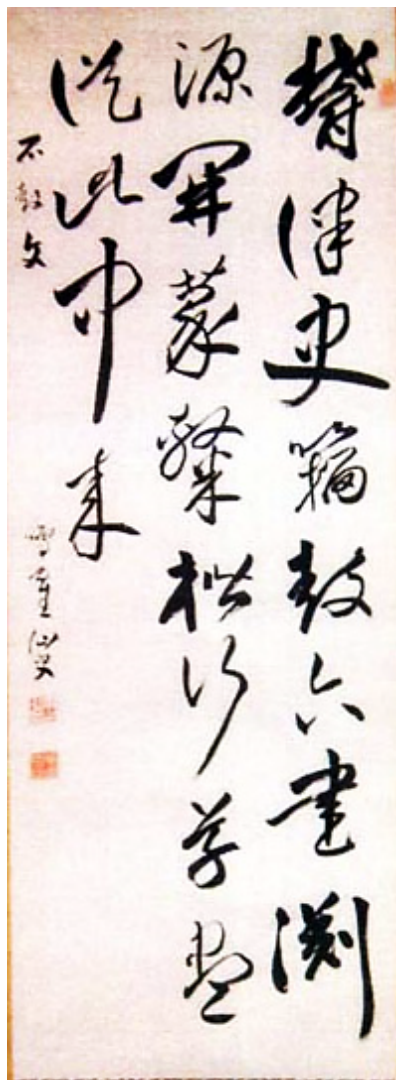
楊守敬の来日



楊守敬肖像



楊守敬との筆談を鳴鶴が書いたもの『八稜研斎随録』部分



鳴鶴書「五言絶句・石鼓文」行草書

鬱律史籀鼓

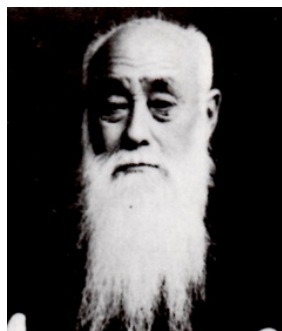
六書淵源開

篆隸楷行草

盡從此中来

石鼓文

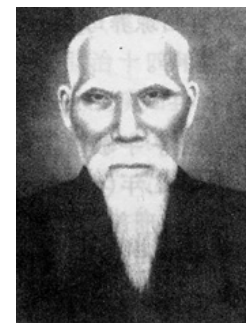
鳴鶴仙史



鳴鶴・大正6年6月(80歳)

官僚・書家。明治12年まで官吏。彦根藩士の次男として東京に生まれた。名は東作、字は子陽、号は鳴鶴・野鶴など。旧姓は田中、22歳の時、日下部家の婿養子となった。大久保利通の信任を受け、太政官大書記官にまで至ったが、大久保利通暗殺後、明治12年、42歳で官を辞め、書道に専念。巻菱湖の真跡手本により独学、王羲之に傾倒し、貫名松翁に私淑、後、楊守敬と出会い北碑の書に開眼。明治14年から全国を巡り、書道の普及と啓蒙に努力した。明治40年、談書会を発足させ、『談書会誌』を発行、また書道雑誌『書勢』を発刊し、鳴鶴流と廻腕法が全国に知られるようになったという。中国に遊び、俞曲園・吳大澂・楊見山・吳昌碩らと交流した。

日下部鳴鶴(1838年・天保9〜1922年・大正11)「日本近代書道の父」と称される。「官途遊戯」



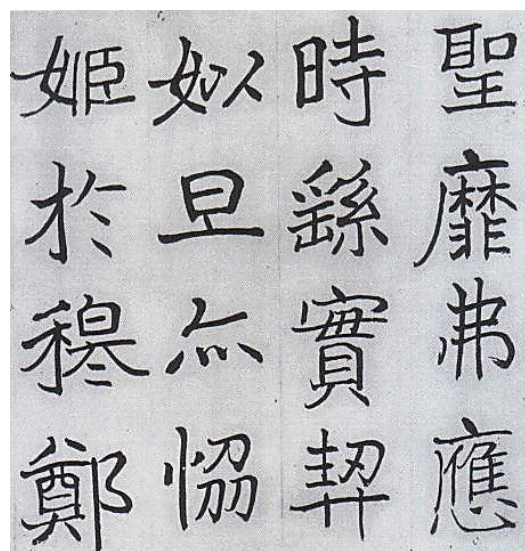
潘存肖像

潘存

(1818?〜1893?)

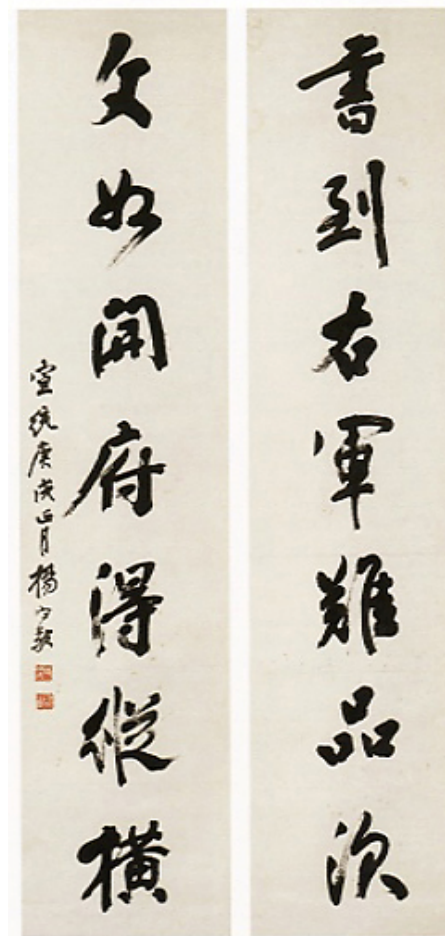
学者、書家、金石学の大家。役人や教師もしていたという。

広東省海南島文昌の出身。楊守敬、中林梧竹の師。



潘存臨「鄭道昭『鄭義下碑』」部分

この鄭義下碑は全臨だが、署名も印もない。楊守敬の跋文によると、「先生は字を書いてもすべて屑かごに捨ててしまつて、人には見せなかつた。」という。潘存は大学者であつたが一冊の書物も著していない。また「いにしえの君子の風あり。」ともいわれ、名誉や金銭を求めなかつた人らしい。



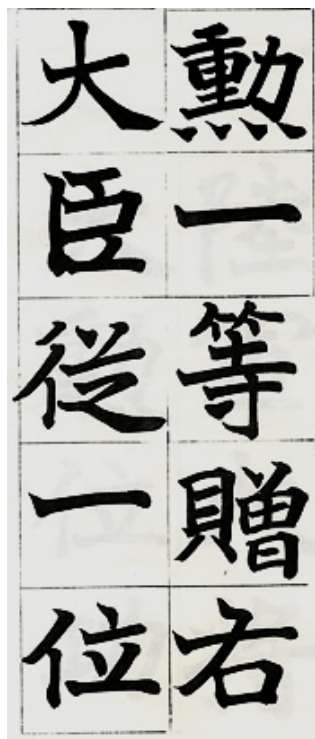
楊守敬「對聯」行書 1910年(宣統2)70

「書到右軍難品次
文如開府得縱橫」
宣統庚戌正月楊守敬
落款から、宣統2年(1910)正月に書かれたことが分かる。
楊守敬は篆隸楷行草各體を能くしたが、行書が得意であつた。



鳴鶴書「岸田吟香翁碑」部分拓 明治44年建立

隅田川神社境内
撰文は三島中洲、篆額は楊守敬
吟香は、画家の岸田劉生の父。



「大久保公神道碑」真蹟 部分
1 桝 5.5×5.8 cm、全 2919 字

150 日かけて書かれた、日本最大の楷書碑らしい。
鳴鶴は生涯に千数百ほどの碑を揮毫したらしい。
力強い線質は、鄭道昭から、字形は初唐と北魏碑の楷書を融合させたものらしい。

鳴鶴は、礼器碑を漢隸中第一と評価していたらしい。この隸書碑は、礼器碑を学んだ成果と思われる。
岸田吟香は米人医師へボンと出会い、辞書の編集を助けたり、日本初の液体目薬を販売したり、日本初の新聞を創刊したり、様々な事業を創始した多才な人である。また、俞樾が編集した『東瀛（えい）詩選』を企画した。



くさかべめいかく おおくぼこうしんどうひ ひよう
日下部鳴鶴書「大久保公神道碑」(碑陽)

明治11年勅令、揮毫は明治43年(73歳)建立は1913年(大正2)東京・青山霊園内篆額「贈右大臣從一位大久保公神道碑」篆額の筆者は伏見宮貞愛親王撰文は重野成斎

北碑風楷書の集大成

鳴鶴の最高傑作と羅振玉は言っている。

しかし。鶴門の四天王と言われる、渡辺沙鷗・近藤雪竹・丹羽海鶴・比田井天来らは、自由な書風を創造していった。
門弟三千人といわれ一世を風靡した鳴鶴の流派は鶴門と呼ばれる。
『書勢』第二巻、第二号の用筆法正解で、鳴鶴は、「書を学ぶに、最も重要なものは、気脈の接続である」「用筆法の根本義ともいべきは、縦せんと欲すれば先ず横し、横せんと欲すれば先ず縦すという一語につきている。」と述べている。



からいもんほう
廻腕法で執筆中の日下部鳴鶴

明治23年10月、帝室技芸院が設けられ、技芸員に推薦された鳴鶴はこれを辞退した。断った理由を「やき物師や木工匠と同じにされてたまるか」と弟子に語っている。「書は技芸に非ず」「書は心画なり」と考えていたのである。

明治39年(1906)頃、鳴鶴の門弟の渡辺沙鷗らは、文展加入の請願を準備していた、加入の目的は、書が実用ではなく美術(芸術)であることを認知させることであった。しかし、加入は実現しなかった。鳴鶴は加入運動には加わっていない。その理由は「書は六芸の一つであり断じて絵画などの下風に立つものではない・・・」ということらしい。
鳴鶴は書道に専念する前には、官僚として立身出世を夢みていたようである。役人根性が本姓だったのか、はじめは独創的な書を書いていた鳴鶴だが、鳴鶴流を確立し、それが小学校の習字手本に用いられるようになると、明治政府の「正しく美しい文字を書く」国民の育成に配慮して、自由な書風を忘れ、単なる書道教育者に成り下がってしまったようである。

なかばやしちく

中林梧竹（1827年・文政10（1913年・大正2））書家。小城藩士（佐賀県）の長男として生まれた。



梧竹 明治37年（1904）78歳頃

名は隆経、通称は彦四郎。字は子達。号は梧竹、劍書閣主人など。幼少より書の才能を発揮、神童と称された。「小城には硯を磨りほがした子供がいる」と噂された。1845年（弘化2）18歳、藩命で江戸留学、書を山内香雪・市河米庵に学び、28歳で帰藩し役人になる。33歳頃、長男経雅誕生。44歳の時、廃藩置県となり、以後仕官することなく書に専念した。50歳まで小城で暮らす。

1878年（明治11）長崎で余元眉と出会う。

1882年（明治15）56歳、余元眉と共に清国に渡り、北京で潘存に師事し、1年8ヶ月間、書や水墨画を学び、六朝期の碑帖を多数持ち帰った。

1884年（明治17）58歳、副島種臣、松田正久らの紹介で銀座の伊勢幸洋服店に30年間ほど住み、「銀座の書聖」と呼ばれた。その間、全国を遍歴。

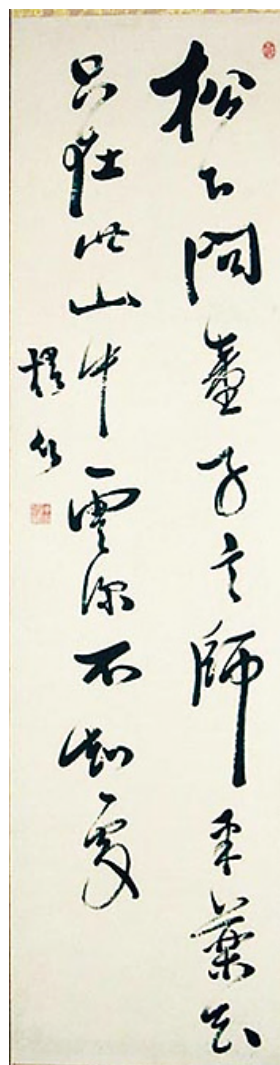
1897年（明治30）71歳、北京再訪、漢代の碑帖を多数持ち帰る。

1906年（明治39）80歳、小城に帰り観音堂の建設を発願。梧竹は深く観世音菩薩に帰依した。

1908年（明治41）82歳、小城の三日月村に観音堂、梧竹村荘完成。帰郷。この頃『梧竹堂書話』の執筆開始。

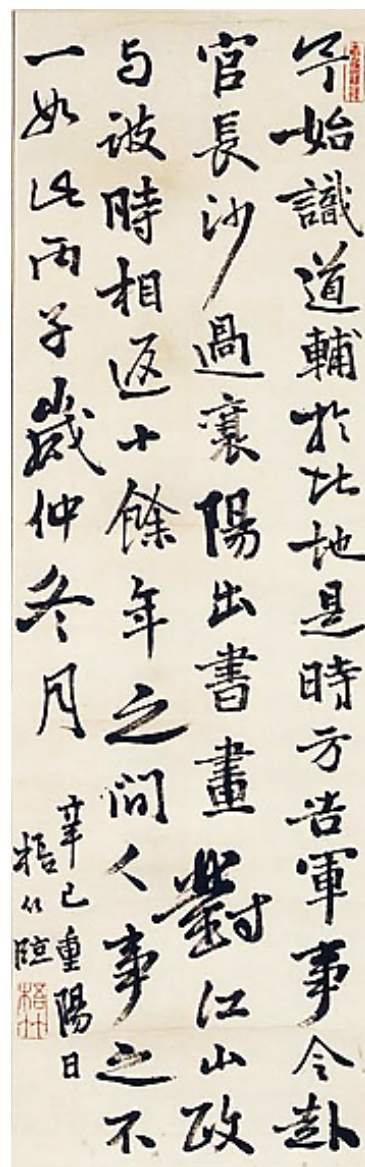
1912年（明治45）銀座の理髪店で倒れる（脳卒中）。1913年（大正2）8月4日、三日月村で逝去。

日野俊顕著『中林梧竹の書』天来書院、を参考にして、梧竹の書業を概観してみよう。

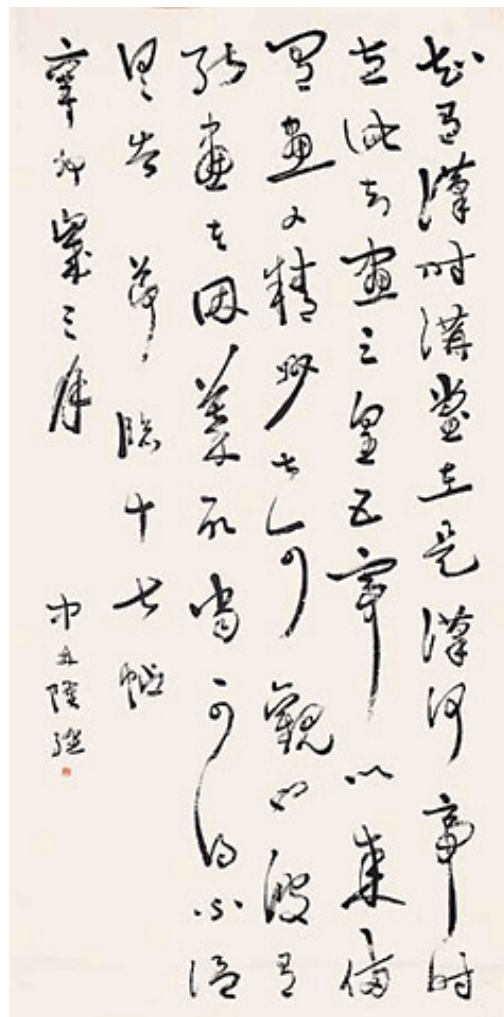


梧竹「尋隠者不遇」50歳頃
113×30 cm 個人蔵

松下問童子 言師採藥去
只在此山中 雲深不知處
賈島の詩が描く山中の
風景や情感を絵のように描
いている。明清文人調の書。



梧竹臨「王羲之・十七帖・題跋」55歳
69×21.5 cm 小城市立梧竹記念館蔵



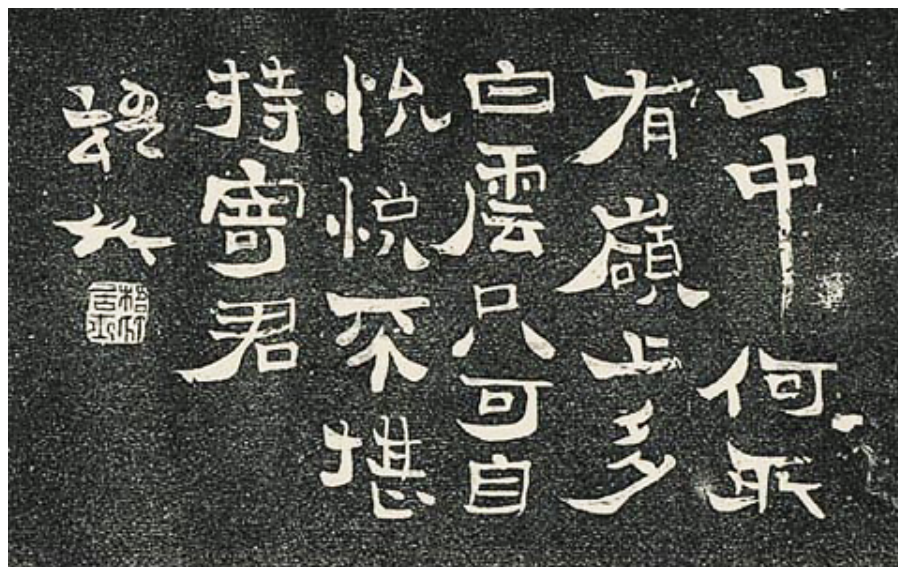
梧竹臨「王羲之・十七帖」1891年（明治24）65歳
69×21.5 cm 小城市立梧竹記念館蔵
副島種臣の勧めにより明治天皇に献上された。
個性的な臨書。意臨、形臨、背臨などという概
念は当てはまらない。

惟れ、般中末、其の盤を作る。其れ萬年眉寿疆り無し。子々孫々永く之を宝用せよ。



梧竹臨「周般仲盤銘」60歳代 102×33 cm

徳島県立文学書道館蔵
朱為弼著、阮元編の『積古齋鐘鼎彝器款識』によっている。点線筆法が見られる。



梧竹「陶弘景『詔問山中何所有賦詩以答』」60歳頃 20×30 cm 個人蔵

山中何所有 嶺上多白雲 只可自怡悦 不堪持寄君 梧竹
潘存の影響が見られる北魏風の書。「雲」は鄭道昭がルーツである。
詩の情感や状景を描くよりも、漢字の造形性を研究した時代。



梧竹「字摹王内史」57歳 北京での作 41.8×33 cm

字模王内史 詩愛鄭都官 於北京書 梧竹

梧竹は、特に、南北朝を代表する鄭道昭と王羲之の学習に努力したという。

「筆意を漢魏に取り、筆法を隋唐に取り、これに晋人（王羲之）の品致を帯びさせ、さらに日本武士の気象を加える。是れ吾家の書則なり。」『梧竹堂書話』第9則より）

（「品致とは」珠寶の光りの如し、点画の内に在つて、点画の内に在らず。点画の外に在つて、点画の外に在らず。」

「右軍の書の及び難き所以の者も、亦た実に風神の高きに在り」「風神」の「風」は、外に漂う氣のこと。「神」は精神のこと。「風神」は「品致」と同じ意味と考えられる。

「書の氣韻有るは、猶花草の生氣有るがときなり。品致、此に由つて生ず。今夫れ綵剪の華は、艷麗目を奪うも、還つて野花潤草の瀟洒たるに如かざるは何ぞや。其の生氣無きを以てなり。氣韻無き書は、乃ち綵剪の華の類なり」

「其の風神縹渺の処は、ひとえに余韻に在り。右軍の書の如き、其の遒潤人に過ぐる処は、あげて余韻のさかなるに在るなり」

「余韻は正氣より生ず。正氣充て、而る後に筆勢全く、筆勢全くして、而る後に余韻生ず」。しかし、十分な筆勢を実現するためには「鍊筆」によつて用筆法・運筆法に習熟していなければならぬ。『「鍊心」だけでは品致ある書は創造できない。『梧竹堂書話』は没後発見され、1931年（昭和6）に出版された。

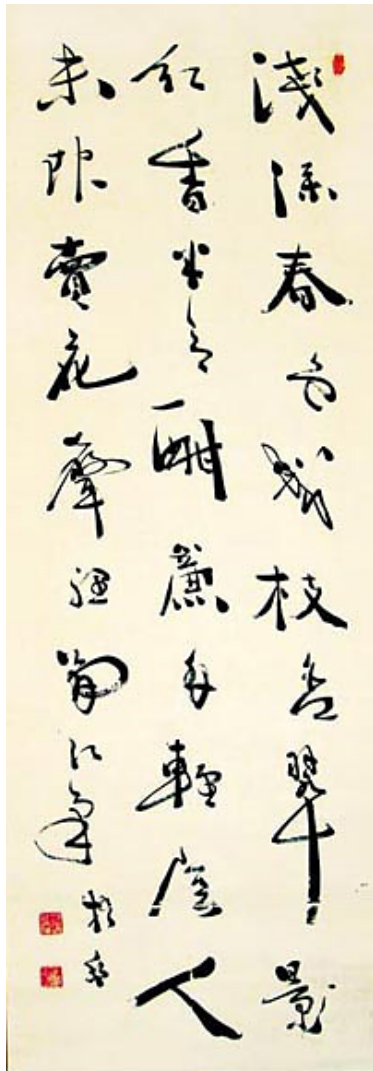
燈を懸けて 清夜を照らす 葉は落つ 堂下の雨 客 酔いて 已に語無く
秋虫 自ら 相語る 梧竹



梧竹「中画箋蓮落 五絶」73歳

これは、梧竹独創の「連綿草書」への過渡期の作といわれる。

浅深の春色 幾枝含む 翠影 紅香 半ば酣ならんと欲す 簾外 輕屋 人 未だ起きず
売花声裡に 江南を夢む 梧竹



梧竹「七絶・浅深春色」70歳前後の作
153.5×53.5 cm 個人蔵
羊毫超長鋒筆使用

飛んで机頭に止まりポツポツと欣ぶ 端溪踏破す墨痕の雲 人間の造字に生氣なし
鳥跡詳に観る天理の文
甲午の歳十一月二十日、冬暖春の如し。南窓を開いて紙を展べ、揮毫すること数紙。
鳩机上に飛び来たつて去らず。相なれたる者の如し。籠にこれを捕らえて養う。梧竹



梧竹「鳩の詩」1894年(明治27)68歳
180×63 cm 徳島県立文学書道館蔵
「ナマズの髭」と呼ばれた、
羊毫超長鋒筆を使用している。

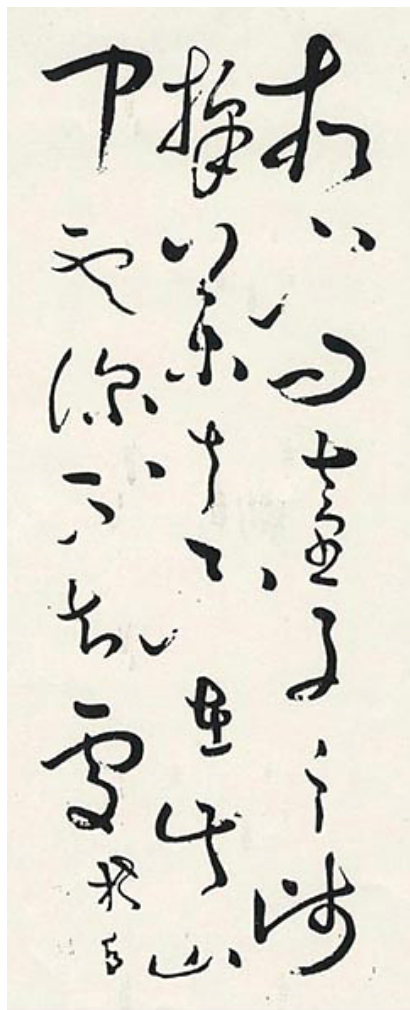


かいつうほうやどうこくせきりんしよ
梧竹「開通褒斜道刻石臨書」部分 70歳代
「大」「字」 点線筆法の例

余元眉や潘存から伝授された「横から立ち書き」(起立書法)の筆法で書かれたか?



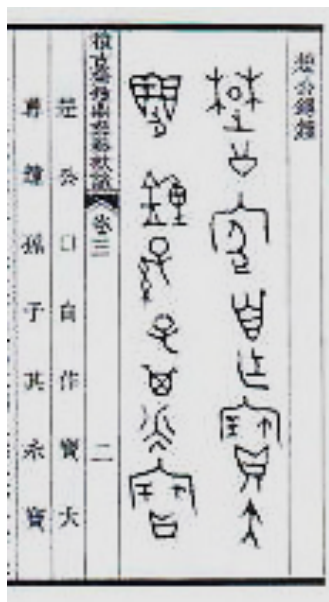
かいつうほうやどうこくせき
「開通褒斜道刻石」拓本部分



梧竹「尋隠者不遇」85歳 151×60 cm
 徳島県立文学書道館蔵
 賈島「尋隠者不遇」
 松下問童子 言師採藥去 只在此山中 雲深不知處 梧竹
 松の木の下で童子に尋ねたら、「先生は薬草を採りに行きました。この山中においてになるのはたしかですが、雲が深く立ちこめて、その場所にはわかりません」という。



そのうしょう さんだいききんぶんそん
 「楚公鐘」(『三代吉金文存』より)



せきこさいしやうていいきかん し
 「楚公鐘」(『積古齋鐘鼎彝器款識』より)



梧竹「楚公鐘銘臨書」双幅 85歳 各 268×66 cm
 徳島県立文学書道館蔵

楚公鐘は周代の楽器、鐘の銘。『積古齋鐘鼎彝器款識』より。

「楚公口みずから宝大罇鐘を作る。孫子其れ(永く)宝とせよ。八十五叟梧竹」

書道を究めるには、錬心と錬筆による、心技
 一如の修錬が不可欠である。



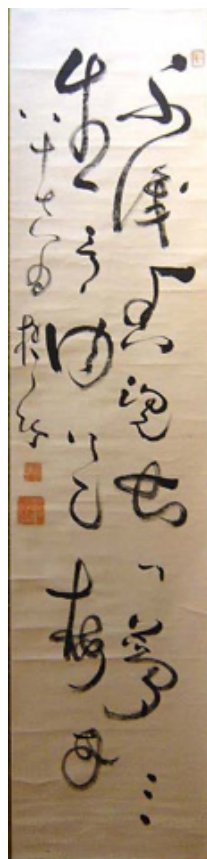
梧竹愛用の筆 小城市立梧竹記念館蔵

梧竹は 70 歳代まで長鋒筆を使っていたようだが、80 歳代からだんだん短鋒になり、晩年は**超短鋒筆**を上海の呉吟軒に作らせている。(右の2本) 左から3, 4番目は「籠巻筆」



梧竹愛用の硯 小城市立梧竹記念館蔵

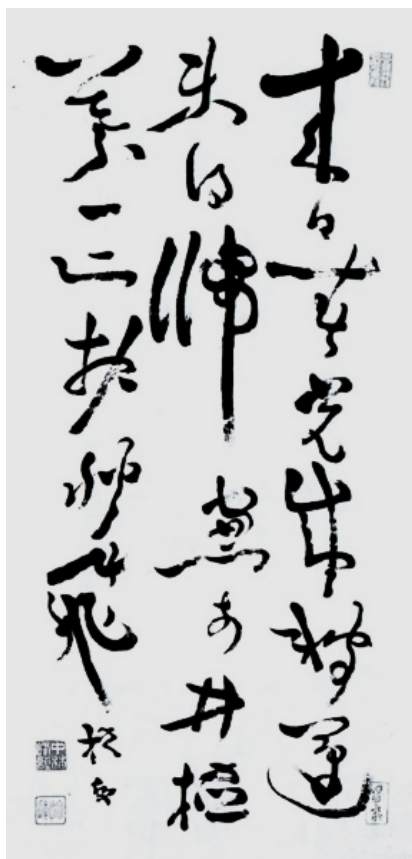
左の筆は、日下部鳴鶴愛用の長鋒筆らしいが、梧竹の長鋒筆もこのようなものであったのだろう。超長鋒筆はどのようなものであったのだろうか？



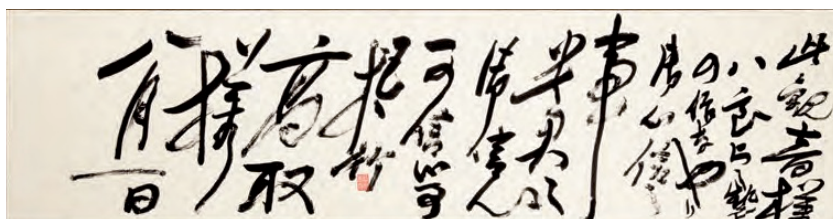
梧竹「禅語？」87歳

中林家13代目の梧竹の生涯は、書一筋の武士道人生だったと言われている。武士道精神と観音信仰が彼の精神的な支えだったようである。

来日春光盛 轉蓬未得歸 窓前井梧葉 一片報秋飛 梧竹

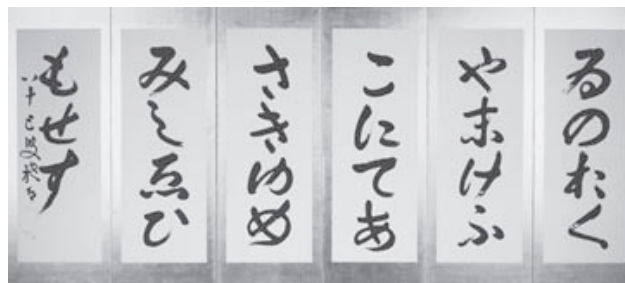


梧竹「五言絶句」86歳 望郷の書

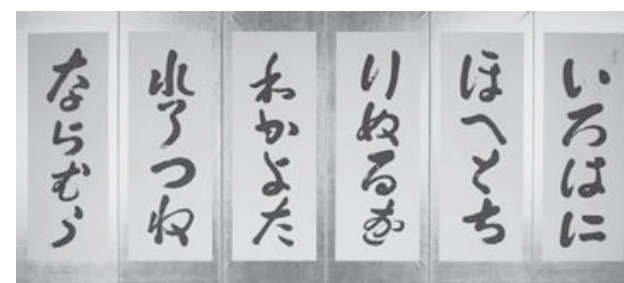


梧竹「書簡」絶筆 1913年（大正2）87歳（死の3日前の作）小城市立中林梧竹記念館蔵

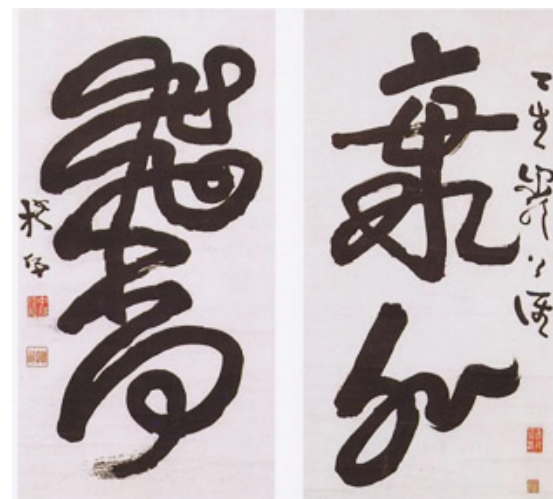
高取伊好宛 書簡（卷子） パترون である高取 伊好に、感 謝の気持ち として贈つ た、高さ10 cmほどの観 音像に添え られた手紙 である。 此観音様 ハ至上之芸 の作なり 御心信之 貴君之 御信心 可候事 梧竹（印） 高取 様 八月一日



梧竹「いろは帖屏風」六曲一双屏風 明治44年（1911）85歳 小城市立中林梧竹記念館蔵 短鋒筆使用と思われる。



梧竹「恬筆以前」86歳 横披 62.5×257.8 cm 徳島県立文学書道館蔵
「恬」は蒙恬のこと。蒙恬は紀元前3世紀の秦の人。筆の改良者といわれる。86歳の時、上海の呉吟軒に作らせた超短鋒筆で書いたもの。



梧竹「巖峯公語・海外飛香」82歳頃 2幅対 各75.5×145 cm 小城市立中林梧竹記念館蔵
「海外に香りをとばす」



梧竹「朱達磨図」60歳代後半 67.5×24 cm 仙台・福島美術館蔵
「面壁九年我百年」と書かれている。

巖谷一六 いわやいちろうく

(1834年・天保5〜1905年・明治38) 政治家・書家 「官途遊戯」



巖谷一六肖像

近江水口藩(今の滋賀県甲賀市)の侍医の子として生まれた。名は修、号は一六、古梅、金粟など。5歳の時父を失い、京都で育った。医学を学び、水口藩の侍医となったが、1868年(明治元年)官吏となり、内閣大書記官などを歴任、貴族院議員になる。京都東山の正法寺に墓がある。

書は初め、中沢雪城に師事、菱湖流を学び、趙孟頫を好んだ。楊守敬が来日すると、日下部鳴鶴らと教えを受け、北碑の書を知り、一六独自の書風へと変化、一家を成した。鳴鶴につぐ多くの碑文を残している。画は藤本鉄石に学び、詩も能くした。児童文学者の巖谷小波は息子。

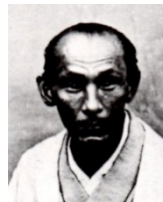


一六「行書五絶」60歳頃 127.5×49 cm

自作の詩 新年吉夢の詩
芙蓉千似顔 一挙跨丹鳳
説向家人誇 新年得吉夢 一六居士

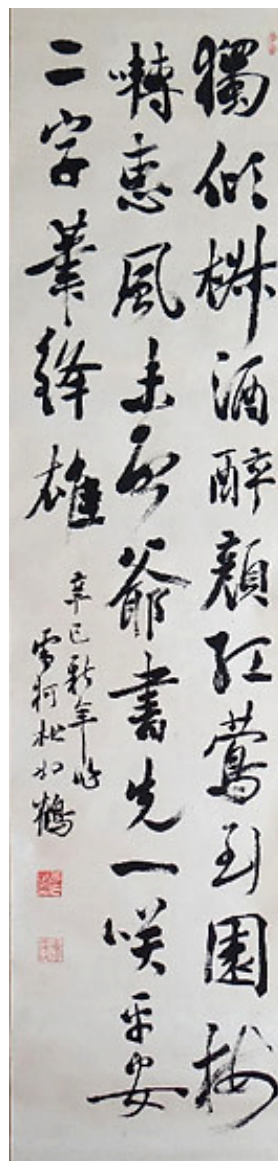
松田雪柯 まつたせつか

(1823年・文政6〜1881年・明治14) 神主・書家 三重県伊勢市の出身



松田雪柯 (55歳頃)

名は元修、号は雪柯、澹所など。家は代々伊勢神宮の祠官。貫名松翁に師事。1878年(明治11)鳴鶴、一六の招きで神主を辞めて上京、一六の家に3年間寓居し、この間、毎週月曜日に「述筆法堂清談会」を主宰、鳴鶴や一六らに松翁の書法や詩書画の鑑識の指導などをした。明治13年、楊守敬に出会い、師事し、北碑の書に傾倒したが、出会って1年ほどで病死した。『段氏述筆法』を執筆し明治13年に自費出版。(80部)



雪柯「七絶」半切 1881年

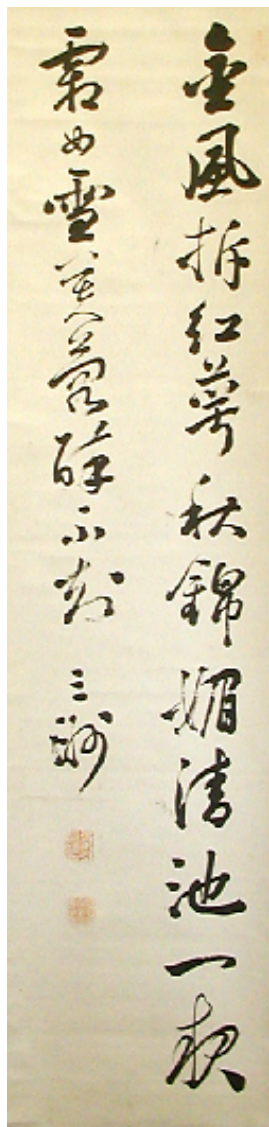
長三洲 ちやうさんしゅう

(1833年・天保4〜1895年・明治28) 官僚・漢学者・書家 「官途遊戯」帖学派。大分県出身。

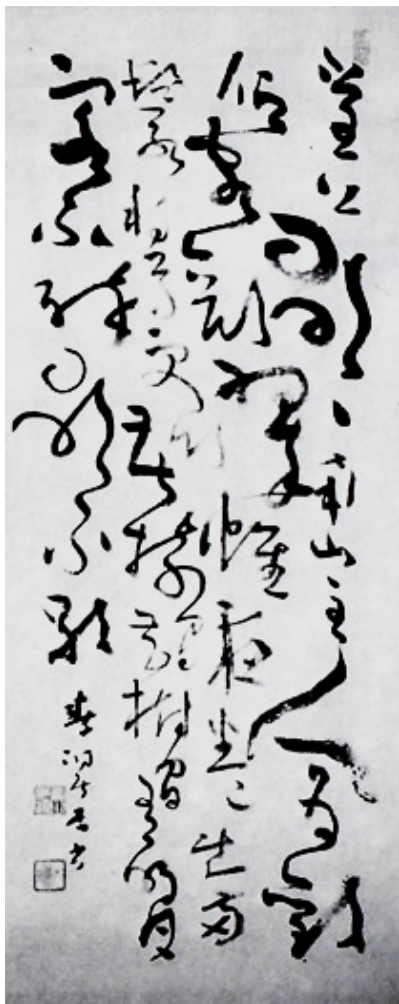


長三洲肖像

名は茂、本姓は長谷。号は三洲。儒家長梅外の第3子。広瀬淡窓門下。維新後は、文部省学務局長、侍読、東宮職御用係などを歴任。明治12年官を退き、詩書画の道に生きた。詩書画篆刻を能くした。書は、生涯にわたり顔真卿に傾倒、顔法で執筆した『小学校習字本』は明治10年に発行された。日本の学制の礎を築き、学校制度の中に習字をとり入れた第一の功労者。



三洲「五絶」春日井市蔵
金風折紅萼 秋錦媚清池
一夜霜如雪 芙蓉醉不知

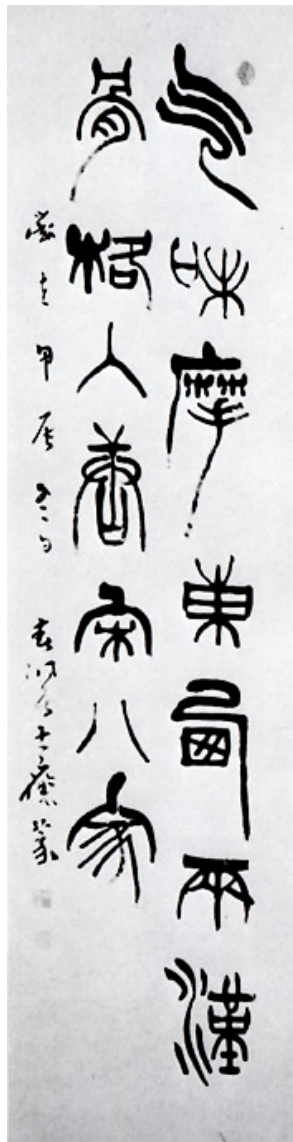


春洞「高青邱堂上歌行」86×34 cm

1910年（明治43）64歳

「堂上歌 歌南山 主人為飲仰
客顔 翠維夜卷出両鬢 移尊更
飲花樹間 花樹間 有明月 客
不醉 歌不歇」

晋唐の古典への回帰



春洞「気味摩東西兩漢骨
格入唐宋八家」140×35 cm

1904年（明治37）58歳

金文による作



春洞「満堂和気生嘉福」

1894年（明治27）48歳

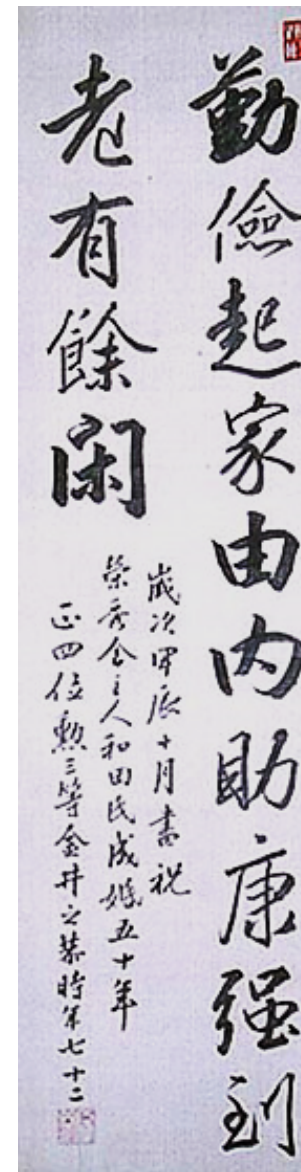
128×32.5 cm 隸書体

徐三庚の学習のまとめ



西川春洞肖像

にしかわしゅんどう
西川春洞（1847年・弘化4〜1915年・大正4）書家 多芸多能の人
名は元讓、号は春洞・如瓶人・大夢道人・謙慎書主人など。肥前（佐賀県）唐津藩藩士の子として江戸の日本橋に生まれる。西川家は代々、医をもつて藩に仕えた。5歳から中沢雪城に入門。22歳で大蔵省に出仕したがすぐに辞め、書道に専念した。渡清せず拓本や法帖で学んだ。清代の楊沂孫、徐三庚、趙之謙らの書を好んだ。特に徐三庚に私淑した。門弟二千人といわれ、明治の漢字書道界で、日下部鳴鶴に並ぶ勢力を持っていた。今日の漢字書道界はこの二人の系列を中心につくられている。謙慎書道会をつくった西川寧は三男である。



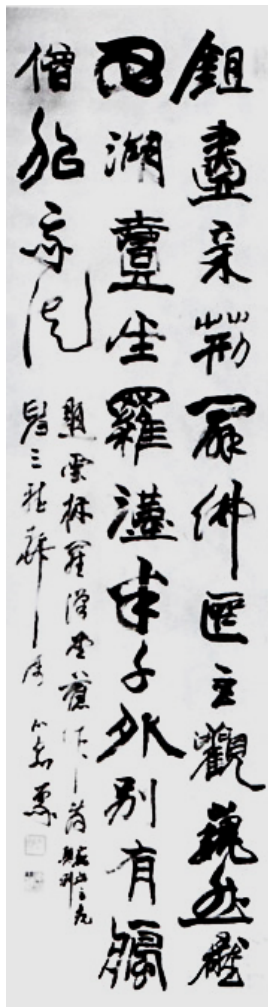
金洞「行書幅」絹本 130×37 cm

1904年（明治37）



金井金洞肖像

かないこんどう
金井金洞（1833年・天保4〜1907年・明治40）官僚・書家「官途遊戯」帖学派（保守派）
名は之恭、号は金洞・梧樓・錦鶏など。画家金井烏洲の子。群馬県伊勢崎市の出身。
内閣大書記官、元老院議員などを歴任。貴族院議員。
書は、初め、中沢雪城に学び、のち貫名松翁に私淑し、その後、顔法に行きつく。
日本書道会、書道奨励会の会長等を歴任した。



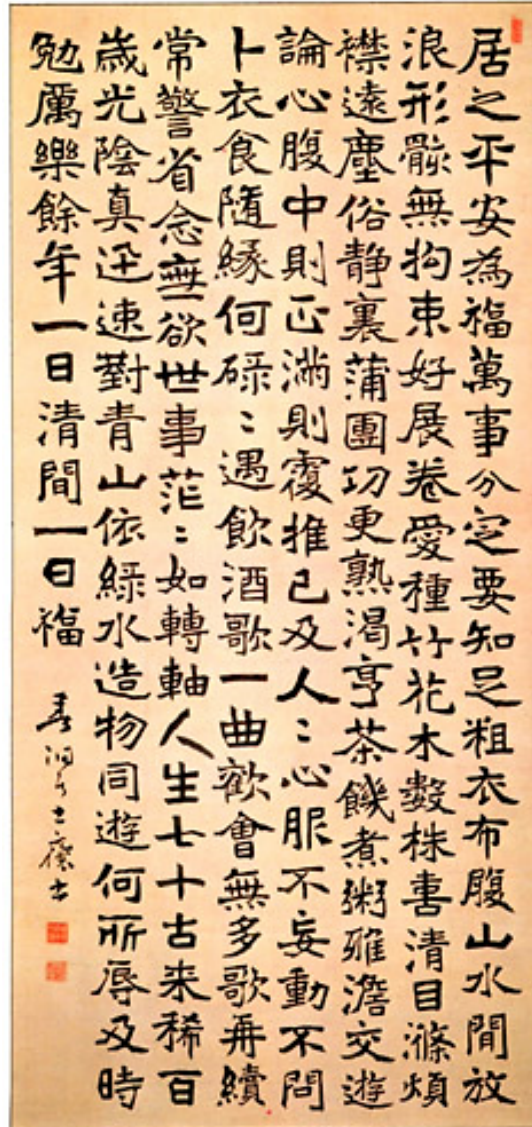
心泉「七絶」154×44 cm
「鉏耒亲荆闢佛區 巨觀巍然壓西湖 壹堂羅漢半千外 別有瘋僧似我徒」
一幅の中に篆、隸、楷、行、草が書かれている。一般には珍しい書風。



心泉 (30 歳)

俗名は蒙、字は心泉、号は月莊、小雨など。金沢市常福寺の住職の子。常福寺 14 世。布教のため上海に渡り、延べ 15 年ほどを中国大陆で過ごし、北碑の書風を学んだ。晩年、住職を罷免されたり、僧籍を除名されたりした。晩年、脳出血で右手が不自由になっても左手で書き続けた。

北方心泉 (1850 年・嘉永 3 ～ 1905 年・明治 38) 僧侶、書家。岸田吟香、俞樾らと親交。



春洞「沈石田安居歌」1912 年 (明治 45) 66 歳 178×85 cm

鄭道昭や張猛龍など、北碑からの影響大の作品



春洞「彫蟲刻華」1904 年 (明治 37) 58 歳 122.5×30 cm 徐法から離れた作 篆書

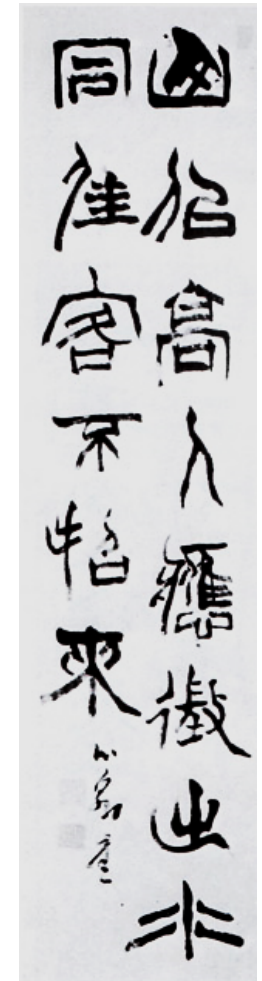
明治時代の書道の中心は東京であった。明治の漢字書道界は、鳴鶴派と春洞派の二大門流に大別される。鳴鶴派を山の手派、春洞派を下町派、と呼んだりするようである。山の手は、江戸時代には、大名などの武家屋敷が建っていた地域で、明治になつてからは華族、官人、軍人、学者の邸宅が多く建てられていた。下町は、職人の大棟梁や問屋や大店が多く集まっていた。山の手派は、巖谷一六、日下部鳴鶴ら山の手に住む官僚が多かった。下町派は、西川春洞、成瀬大城、高林二峯・五峯、斎藤芳洲、柳田正齋・泰麓、岡本可亭、中村胡桃、皆川泰岳ら下町に住む書家たちである。彼らの本業は塾経営であった。



西川春洞と門弟たち (明治 42 年頃)
春洞門は門弟 2000 人といわれる。



日下部鳴鶴と門弟たち
鳴鶴門は門弟 3000 人といわれる。



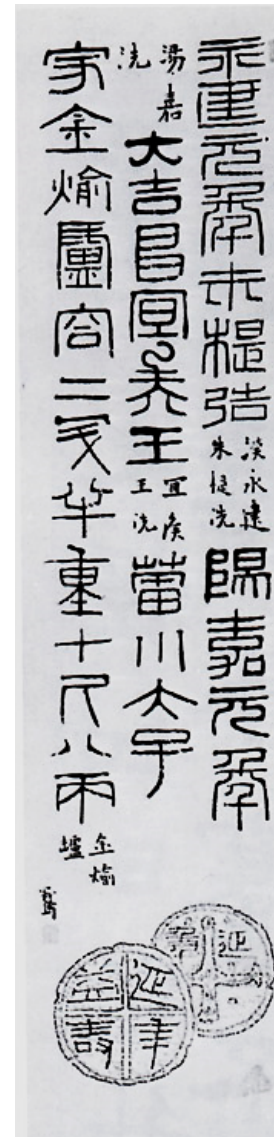
心泉書 136×34 cm 晩年
「山似高人應微出
水同佳客不招來」
篆隸を行草書のよう
に自由に書いている。
心泉篆と呼ばれる。
魯山人は、「心泉は鳴
鶴より天分がある」と
称賛している。

前田黙鳳 (1853年・嘉永6〜1918年・大正7) 書家

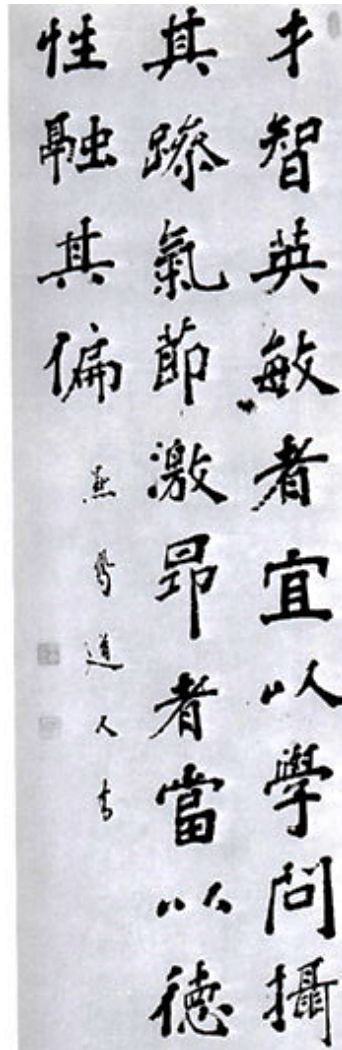


前田黙鳳肖像

名は圓、号は黙鳳・龍野人など。龍野藩士の次男として、今の兵庫県たつの市に生まれた。
1882年(明治15) 東京京橋に鳳文館を設立、清国に渡り金石学や書法を学んだ。
1902年(明治35) 書学会を発足し会報『書鑑』を発行、法帖類などの普及に努める。
1908年(明治41) 中村不折らと健筆会を起し、展覧会を開催し、六朝書の研究に
取り組んだ。1914年(大正3) 中村不折と井上靈山が刊行した『六朝書道論』の巻
末の付録に書論を書いた。書は篆書体と北碑風の楷書が得意という。



前田黙鳳臨「古銅器銘」
50歳頃 136×32.7 cm
下部には古瓦の模写。



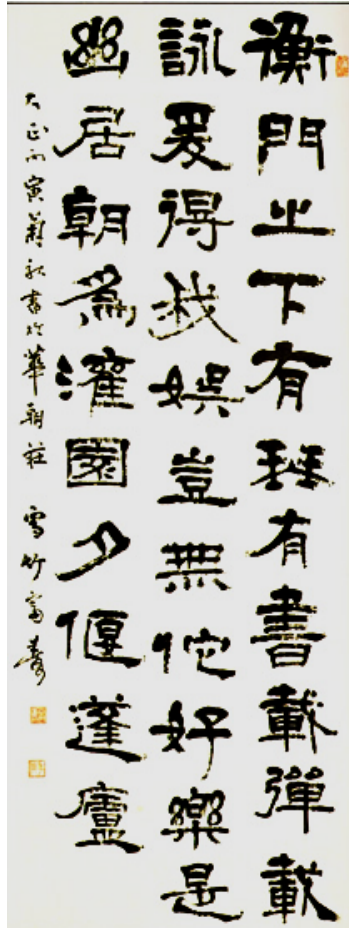
前田黙鳳「古語」136×47 cm
六朝風の楷書
「才智英敏なる者は宜しく學問
を以て其の躁を摂むべし。氣節激
昂の者は當に徳性を以て其の偏
を融かすべし。」(陸湘客)

近藤雪竹 (1863年・文久3〜1928年・昭和3) 山形藩江戸屋敷で生まれた。名は富壽、号は雪竹・聴泉



近藤雪竹肖像

楼主人など。16歳で日下部鳴鶴に師事。鶴門の四天王の一人。
43年間、通信省に勤務。書は隸書が得意。鳴鶴亡き後、鶴門を背負って立った。談書会、
日本書道会、文墨協会、健筆会、書道奨励協会、日本書道作振会、戊辰書道会などで幹事、
審査員となった。門弟三千人と称せられ、高弟に川谷尚亭・辻本史邑・松本芳翠らがいる。



雪竹「隸書条幅」1926年(大正15)
64歳 176.5×66.7 cm
「衡門之下 有琴有書 載彈載詠
爰得我娛 豈無他好 樂是幽居 朝
為灌園 夕偃蓬廬」
(陶淵明「答龐參軍」より)
衡門の下 琴有り書有り 載ち彈
じ 載ち詠じ 爰に我が娛しみを
得たり 豈に他の好きもの無からんや
是の幽居を楽しむ 朝には園に灌ぐ
ことを為し夕には蓬廬に偃す

わたなべさおら
渡辺沙鷗

(1864年・文久3〜1916年・大正5) 書家。鶴門四天王の一人。



渡辺沙鷗像 晩年

名は周、号は沙鷗・東海道人など。名古屋出身。12歳の時、恒川岩谷に師事。15歳で門弟千人以上といわれる中で助教授に拔擢され、師の代わりに週に何百枚もの条幅手本を揮毫したという。1890年(明治23)上京し日下部鳴鶴に師事。鳴鶴の勧めで一六、中林梧竹を訪ね、梧竹に心酔、その書論の実践者となる。

「余の書道研究と梧竹先生の書論」を投稿。その中で、沙鷗は梧竹の書論を以下のように述べている。

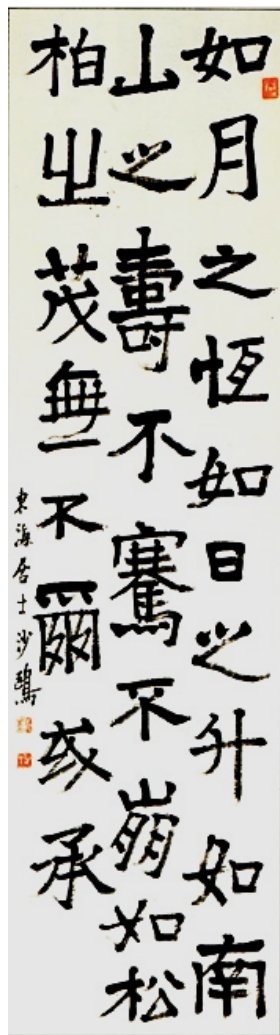
「現今、師匠の流儀によつて型の如き書で満足している者の多いのは誠に遺憾である」「人にはそれぞれ個性がある。書には筆者の個性が表現されていなければならない」「書に限らずすべての芸術は人格の表現である。書学を修むる者は徒らに筆端の末技のみに腐心せず、その根本たる精神修養の一大事に考え及ばねばならない」「書の研究方法としては、日本は勿論、唐宋、六朝辺の大家の書を自分の血肉とし、その後においてはじめて自己の本領を発揮すべきである」沙鷗は、この論文の中で、「梧竹先生の説に従い、先生の指導を仰ぎながらその通りに学んだ」と述べている。彼は鳴鶴門の四天王といわれるが、鳴鶴の指導はあまり受けず、梧竹に深く傾倒し、学んだ。

1901年(明治34)「六書協会」が創設され、その発起人となり、第1回展が開催された。

1907年(明治40)明治39年に「六書協会」は解散、その延長に「日本書道会」が創立され、幹事になる。

1911年(明治44)沙鷗主宰の「日本書道会」第1回展が両国の回向院で開催された。

沙鷗は、書道人の団結を呼びかけ、一般社会に、書が芸術であることを認めさせるため、展覧会を組織し、その育成に努力したが、52歳、夢なかばで早逝した。



沙鷗書「詩経・小雅天保」楷書

40歳代 151×40.5 cm
「如月之恒如日之升如南山之壽不騫不崩如松柏之茂無不爾或承」
升崩或
不騫不
如日之
如月之
如南山
如松柏
承
こに
推
重
て、こ
いう。



「日本書道会記念写真」東京・赤坂寒翠園

明治15年の「書は美術ならず」論争で、「書は芸術ではない」と断定した小山正太郎は、最後に「もし自分のいうことが疑わしいと思ったら20年後の美術界での書の位置を見て欲しい」と述べた。はたして、20年後、まだ、美術界から書は美術であると認定されてはいないが、ますます隆盛になっていた。

小山の意見は素朴な印象に過ぎなかったが、しかし、書の隆盛が良いとばかりはいえない。なぜなら、書は、西欧列強と肩を並べ、世界侵略へと舵をとろうとする帝国主義日本の、国威発揚の文化的象徴でもあったからである。

「書の価値は書かれた文章に従属するものではなく、それ自体で自立した造形芸術である。」と反論した岡倉天心は、明治36年(1903)ロンドンで『東洋の理想』(英文)を出版し、その中でも、「書は線の芸術の純粋なるものであって、その点画のなかに生と死との契機を内包しているが、かくのごときものが一個の高い芸術として成立したという事実の中に、われわれは東洋芸術の真相を見出すことができる。」と、書の芸術性について述べている。

また、中林梧竹は、書は学問や人格に奉仕するものではなく、東洋独自の造形芸術であることを実証した。

丹羽海鶴 (1864年・文久3〜1931年・昭和6) 岐阜県中津川市出身の書家。鶴門の四天王の一人。



丹羽海鶴肖像

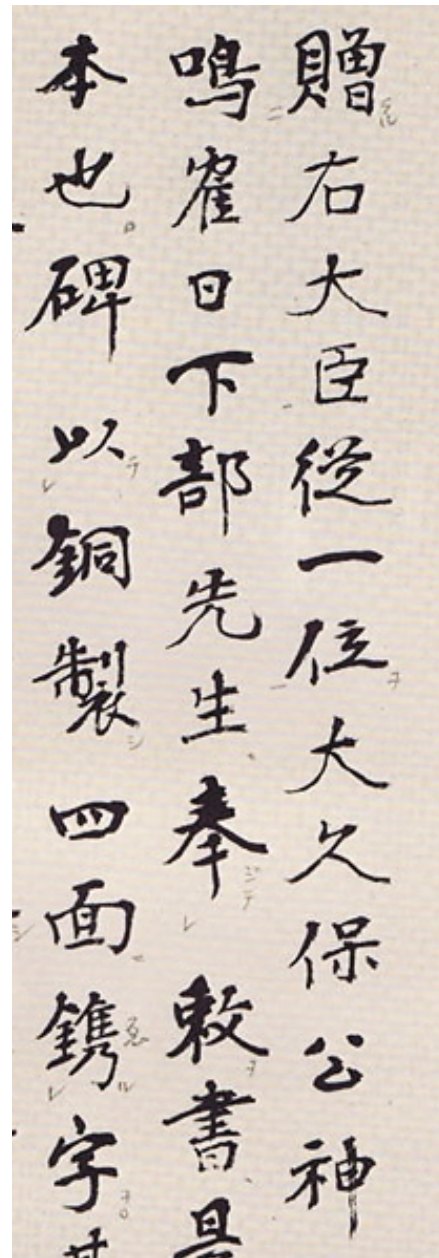
名は正長、海鶴は号。庄屋の四男。小学校教師をしながら書道を研究した。26歳の時、日下部鳴鶴に師事。通信教育の後、内弟子になった。書は、はじめは北碑風、のちに晋唐風を研究し、楮遂良に傾倒した。その書風は海鶴流と称され一世を風靡し、比田井天来とともに書壇の双壁と目された。特に書道教育界への影響が大きく、彼は学習院教官、東京高等師範学校講師、

文部省教員検定試験委員(習字科)などを歴任した。

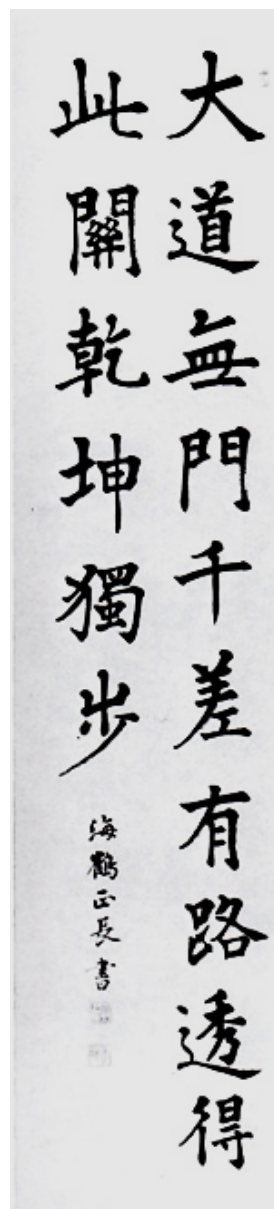
習字教科書の書風は、昭和初期までは顔法であつたが、海鶴は習字の基準を初唐の楷書におくことを提唱した。

門弟の鈴木翠軒が、国定教科書を執筆するようになって、初唐の楷書が書道教育の基準として確立された。

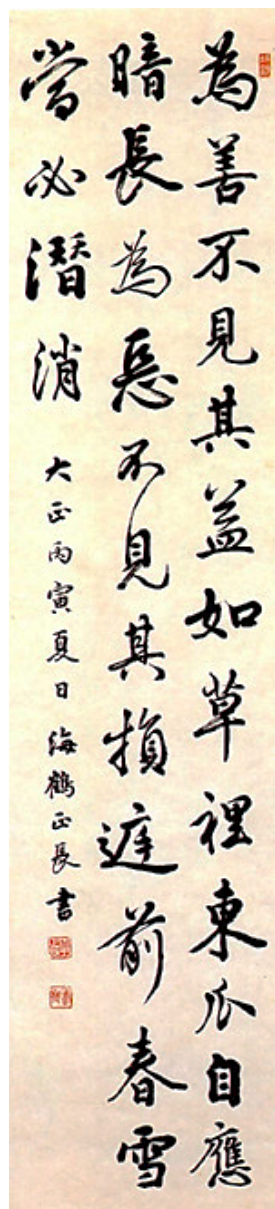
門弟には、鈴木翠軒をはじめ、田代秋鶴、田中海庵、井上桂園、藤原鶴来らがいる。



海鶴「大久保公神道碑跋文」部分



海鶴「無門関の序の結びの一句」134×30.2 cm
孟法師碑の影響



海鶴「行書文語」136×32 cm
1926年(大正15)62歳
成田山書道美術館蔵

海鶴流として一世風靡した書は、鄭道昭を基調として、初唐の虞法と楮法を加えた、穩健中正で氣品があり、壮大で、骨力豊富な書風である。

海鶴の書塾の「書法教授概則」

- 一、書体 楷、行、草ノ三体トス 一、教授方法 先ツ楷書ヲ授ケ、其進境ヲ見テ他ニ及ボスモノトス
- 一、手本 楷、行、草、何レモ一ヶ月所定用紙一枚六字詰五枚トス 一、教授日 毎日曜ノ午前八時ヨリ同十一時マデトス 一、通信教授 清書ノ添削ハ毎週一回、半紙四枚ヲ限度トス。清書ハ毎土曜日ニ到着スルヤウ郵送セラルベシ、之ニ運筆結体ノ法ヲ簡易ニ説明シテ返送ス

一、月謝 金五円(今の4000円くらいか)

昭和4年5月

丹羽海鶴

比田井天来（ひだいてんらい）（1872年・明治5〜1939年・昭和14）書家、「現代書道の父」と呼ばれる。



比田井天来肖像

名は鴻、号は天来・画沙・大樸など。長野県佐久市出身。鶴門の四天王の一人。門弟に金子鷗亭、手島右卿、徳野大空、上田桑鳩、武士桑風、桑原翠邦らがいる。1892年（明治25）19歳、上京、日下部鳴鶴に師事。1901年（明治34）28歳、小琴と結婚。東京陸軍地方幼年学校習字科教授嘱託。

1902年（明治35）29歳、私塾を開く。
1914年（大正3）41歳、鳴鶴の『書勢』を引き継ぐ。
1915年（大正4）42歳、東京高等師範学校習字科講師。
1916年（大正5）43歳、内閣教育検定委員会臨時委員。
1921年（大正10）48歳、『学書全蹄』刊行。
1926年（昭和元）53歳、朝鮮遊歴。
1927年（昭和2）54歳、書学院創設。
1932年（昭和7）59歳、東京美術学校講師。
1933年（昭和8）60歳、神奈川師範学校講師。
1935年（昭和10）62歳、台湾遊歴。
1937年（昭和12）64歳、大日本書道院創立。帝国芸術院会員に推挙。



ふぎようほう
俯仰法で揮毫する比田井天来

鳴鶴に師事したが、学書は古法帖による独学が中心だった。臨書法は、はじめ、廻腕法で柔毛筆を使用していたが、後に、松田南溟と共に「古法」（俯仰法）を解明し、剛毛筆を使用し、側筆、俯仰など古来の技法を採り入れ、臨書法に変革をもたらした。『学書全蹄』は、「古法」による十数種の古典臨書の集大成である。

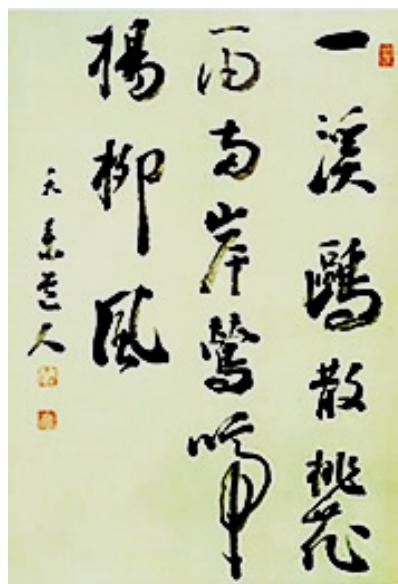
天来の用筆は、柔毛筆から、剛毛筆に変わったが、最晩年の昭和9年頃、再び、柔らかい羊毛筆を使うようになった。

彼は、類型化を嫌い、手本を書かず、弟子には、古典に直接取組むように指導した。書が芸術となるために必要なのは、古典の臨書であり、書を学ぶとは、古典の臨書以外にない。そして、古典の筆意や線質は、各自が自分の眼で見、自分で解釈し、自得するほかに道はない、と考えていた。彼の門からは、多くの、個性的な、現代書の開拓者たちが育っていった。また、彼は、書道芸術だけでなく、書道教育者としても活躍した。



天来「龍跳」六曲屏風 1920年（大正9）49歳 縦138×横332cm

剛毛筆で揮毫されたか？



天来「大判色紙」1938年（昭和13）65歳

手術を待つ間に、羊毛筆で揮毫された数十枚のうちの一枚。

「一溪鷗散桃花雨 兩岸鶯啼揚柳風」



天来「望山多遠情」60歳頃
六曲屏風部分 剛毛筆使用
漢代の木簡の筆意をとり入れた隷書



明治末頃の「書展風景」これは明治45年の談書会か
明治末、会場を借りて、書画家たちが家蔵の
書画や文房具などを展覧する雅会や書画会が
盛んに開かれた。1909年(明治42)の健筆会
の第1回展などが有名。「談書会」は鳴鶴が主
唱し、400名の会員からなる書の研究団体。

明治中頃から大正にかけ、多くの書道会がつくられ、会誌を出した。書壇が誕生し、全国的な書道の展覧会が開催されるようになって行く。斯華会の『斯華之友』(明治23年創立)、三条梨堂の『難波津会』(明治23年創立)、山腰弘道の『日本選書奨励会』の『書道』(明治24年創立)、日下部鳴鶴の『同好会』(明治27年創立) 西川春洞の『尚古書道会』(明治30年創立)、斎藤芳洲の『書道奨励会』と『筆の友』(明治33年創立)、明治34年に展覧会を開いた『六書協会』、江木冷灰の『檀麴会』(明治35年創立)、安井朴堂の『以文会』(明治35年創立)、前田黙鳳の『書学会』と『書鑑』(明治35年創立)、諸井春畦の『明治書道会』(明治37年創立)、『日本書道会』(明治40年創立)、『談書会』(明治40創立)と『談書会集帖』、『観鸞会』(明治40年創立)、『健筆会』(明治41年創立)など。これらは、大正13年の『日本書道作振会』結成へと向っていった。明治44年に『書苑』(月刊・100号で完)が創刊された。

「書道雑誌」



「書勢」大正6年
大同書会機関紙



「斯華の友」明治37年
が改題されて「書道研究
斯華の友」大正1年



「龍眠」部分
大正2年



「書苑」明治44年

日本の近代篆刻

1879年(明治12)、円山大迂は上海に渡り、徐三庚・楊見山に師事し、篆刻を学び、日本に両刃の刀法を伝え、日本の刀法を一変させた。その後、楊守敬によって北碑が紹介され、日本でも清国の碑学派が注目された。碑学派の書家の多くは篆刻も巧みであった。それで、日本でも篆刻が流行することになった。日本の篆刻家は江戸時代の高芙蓉の門流(保守派)、渡海派(鄧石如派)、独学者、に大別できるようだ。主流は高芙蓉の門流で、国の公印や天皇の印などを彫っていた。1904年(明治37)、呉昌碩らが西泠印社を創設した。その影響からか、1907年(明治40)、高芙蓉の門流の岡本椿所・五世浜村蔵六・河井荃廬・山田寒山等が丁未印社を創立した。前年の1906年(明治39)、には高芙蓉の門流の篆刻家中井敬所が帝室技芸員に選ばれ、篆刻は大流行した。

円山大迂(1838~1916) 篆刻家(渡海派)

名は真逸、号は大迂、名古屋出身。13歳の時、京に出て、書を貫名菰翁に学んだ。その後、清国に渡り、篆刻を学び、数年後に帰国、熊本、桑名、京都に住み、日本に、両刃の刀法をもたらした。

印譜に『学步齋印蛻』、著書に『篆刻思源』がある。



大迂「圓山真印」6分印



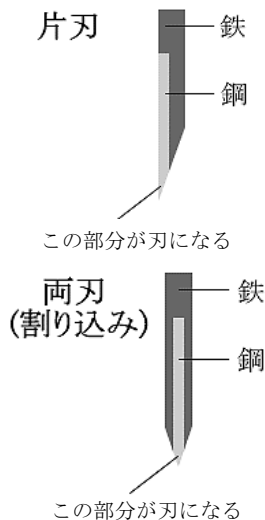
大迂「大迂」6分印



大迂「大迂游清以後作」
7分印



「大迂老者作」青田石
1寸印 明治36年(65歳)



中井敬所 (1831~1909) 篆刻家 (保守派) 印章学者



中井敬所肖像

名は兼之、号は敬所、東京出身。
本姓は森山。22歳の時、中井家の養子となった。
幼少期から篆刻を学ぶ。
明治39年、篆刻家初の帝室技芸員となる。



中井敬所「佛法僧寶」
「仏法僧宝」2.3 cm角
東京国立博物館蔵

篠田芥津 (1821~1902) 篆刻家 (保守派)

名は徳、号は芥津。岐阜県の出身。京都で活躍した。



芥津「櫻谷」

河井荃廬 (1871~1945) 篆刻家 (保守派・渡海派)

名は仙朗、号は木僊・荃廬など。京都出身。



河井荃廬肖像

篠田芥津・呉昌碩に師事。
長尾雨山とともに、西泠印社の社員となった。
毎年のように上海に渡り、中国篆刻界と交流し、
文物の研究と将来に努力した。



荃廬「敬圓融照」



荃廬「聽氷所
藏金石文字」

浜村蔵六・五世 (1866~1909) 篆刻家 (保守派・渡海派)

名は裕、号は蔵六・無咎道人など。



浜村蔵六 (五世)

青森県津軽出身。上京し四世浜村蔵六に師事、
養子となった。河井荃廬に従って中国に行き、
呉昌石等と接し影響を受けた。



蔵六「師曾」



蔵六「陳衡客印」

山田寒山 (1856~1918) 篆刻家 (保守派・渡清派)

曹洞宗の僧侶。名は潤子、号は寒山。



山田寒山肖像

名古屋の出身。小曾根乾堂に師事した。
明治30年 (1897) 清国に渡り、
呉昌碩に師事。大正4年 (1915)、
伊藤博文らの賛助を得て、千葉県銚子市に、
寒山寺別院を建設し住職となる。



寒山「心無罣礙」(銅印)



寒山「因掲陀」(陶印)

中村蘭台・初世 (1856~1915) 篆刻家 (独学派)



中村蘭台 (初世)

名は蘇香、号は蘭台・香艸居主人など。
福島県会津の出身。父は会津藩士で姓は須藤、
勤王思想にかぶれたため藩主の怒りに触れ自刃、
母は3人の子を連れて江戸に出る。

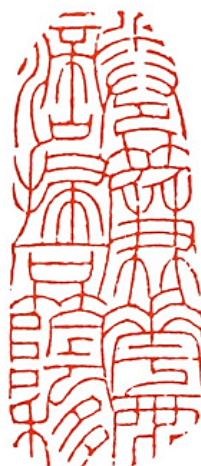


蘭台 (初世)
「子納父」



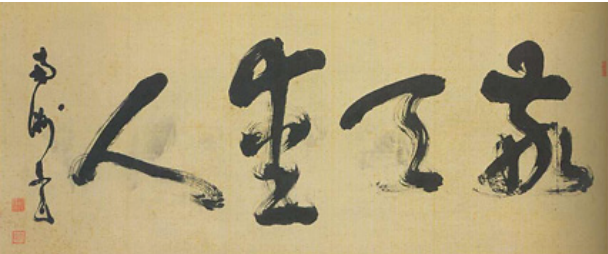
蘭台 (初世)「水流任急
境常静華落雖頻意自閑」

三男の蘭台は、浅草の船問屋に養子に出され中村姓となる。
篆刻の手ほどきは、高田緑雲に受けたらしい。
文彭・何震や秦・漢の印に学び、徐三庚に私淑した。
明治40年の丁未印社創立に参加した。
当時は篆刻だけでは生活できなかったため地方に出かけて、
揮毫したり、筆筒や盆などに彫刻する篆刻工芸などで、
生活していたようである。



蘭台 (初世)「巻簾
華雨滴掃石蔭移」

政治家・元勳の書

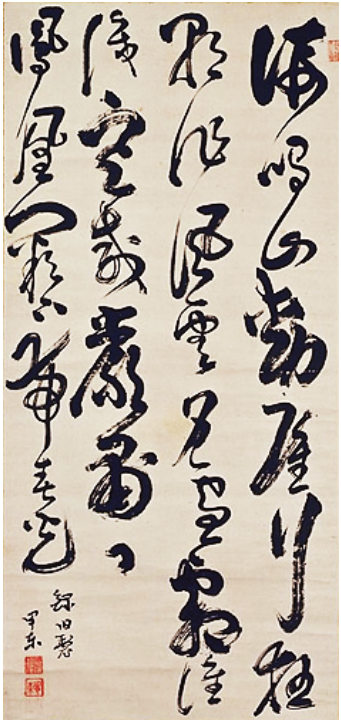


西郷南洲「敬天愛人」62.4×145.4 cm 東京国立博物館蔵

西郷南洲 (1828～1877) 武士、軍人、政治家
名は隆盛。号は南洲 薩摩藩の下級藩士の長男。
明治新政府の参議。西南戦争で敗北し自決(満49歳没)。



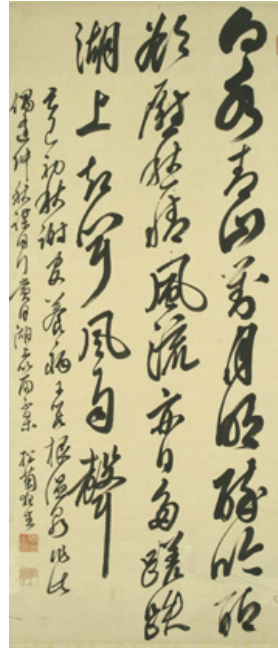
大久保甲東 (1830～1878) 武士、政治家
名は利通、号は甲東。薩摩藩士の長男として生まれる。
明治維新の元勳。西郷の親友。
東京の紀尾井坂付近で暗殺された(満47歳没)。



大久保甲東書 123×58 cm
早稲田大学図書館蔵



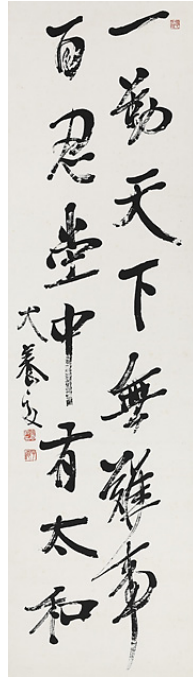
木戸松菊 (1833～1877) 武士、政治家
名は孝允、号は松菊。桂小五郎とも呼ぶ。長州藩出身。松陰の弟子。萩市に藩医の長男として生まれる。西南戦争の半ば、政府と西郷の行く末を気遣いながら病死(満43歳没)。



木戸松菊「七絶」
130.6×56.7 cm
早稲田大学図書館蔵



犬養木堂 (1855～1932) 政治家、書家 保守派
名は毅、号は木堂・子遠など。岡山県岡山市の大庄屋の子として生まれる。文部・外務。総理大臣などを歴任した。
1932年(昭和7) 5月15日暗殺された(享年77歳)。



木堂「一動天下」
144×40.5 cm



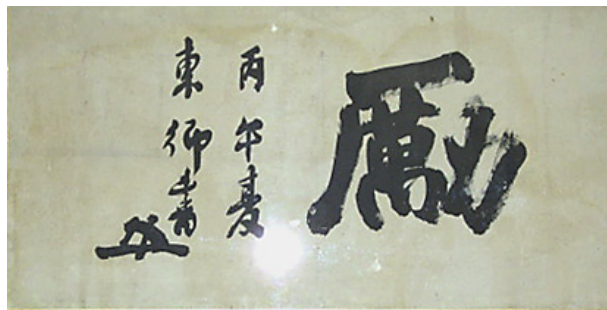
勝海舟写真
勝海舟 (1823～1899)
武士、政治家 江戸の生まれ。
幼名は麟太郎、名は安芳、号は海舟。



勝海舟「人性含霊」
1879年(明治12)
駿府博物館蔵
海舟勝安芳と署名



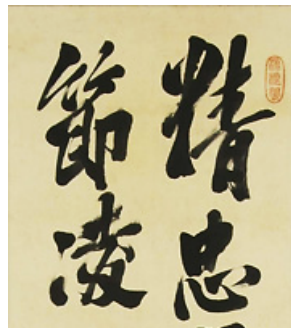
東郷平八郎 (1848～1934)
軍人、元帥海軍大将。
薩摩藩士の子。



東郷平八郎「励」扁額 1906年(明治39) 鹿児島県妙円寺蔵



伊藤春畝 (1841～1909・明治42)
武士、政治家。名は博文、号は春畝など。山口県出身、長州藩士。
吉田松陰の弟子。初代内閣総理大臣。ハルピンで暗殺された。



春畝「二行書」部分 絹本
135.7×34.27 cm
早稲田大学図書館蔵

